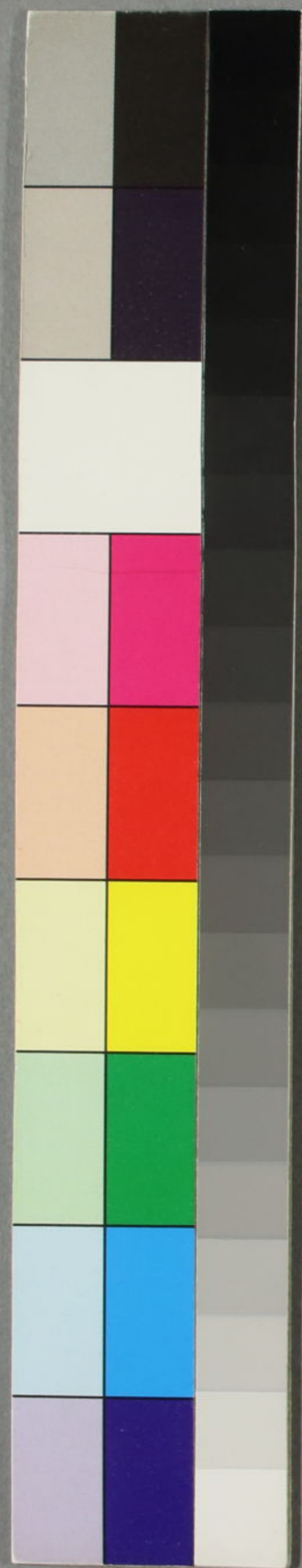


觀音守護寶劍一

~ 13
3707
1



門人 13
號 3707
卷 1

序

莊子之取而述之數也。後之觀
而知有此言者。亦數也。然則
一花之用。一葉之落。鳥之鳴。蟲
之噬。人之所思。所夢。所趨。所
避。鼻口之所納。掌。手。足之所

大正十年八月九日
本大學出版部
贈

踴舞。喜怒哀樂之所觸物而
感。得與不虞。釐乃數已定矣哉。
孟春一夕。所思萬端。淒然不
寐。讀史至於嘉吉。文安。同之
事。既而構思於一樣新語。其
何而成。未遑起艸。友人蓬洲

偶來訪。蓬洲善画及和文。迺
囑之編輯。不日成卷。名曰天
緣奇遇。一編之中。臺是皆寓
言。奚免大方家之笑焉。惟庶
我初弟。嚮子之玩焉者。遺
墓。同銜賣之戲。而知孝弟忠

信。貞。虛。之。端。也。蓬。洲。之。編。輯。
乎。余。之。有。以。交。乎。初。弟。彌。子。
之。玩。焉。者。身。蓋。亦。天。地。間。之。
定。數。也。今。其。謂。天。地。間。之。定。
數。者。豈。亦。知。不。天。地。間。之。定。
數。也。哉。

安政七年庚申季春望日。
書於本岡島彌街碧桃書
屋南牕之下。

羅月野人



竹菴花漆碑

竹菴提膝姊妹淡路島人也天性至孝多色絕
美其母氏病惡疾而家貧不能舉火姊妹憂之
迺與父謀鬻身於幡房室津勾欄以給薪水鑿
藥之用矣嘗與赤松氏史子相悅有愛其画眉
者後悟為父之仇也遂薙髮為尼以全其義眾
無不憐之其年姊妹共沒葬於海上

銘曰

一雙芙蓉高出淤泥

脫盡紅衣蓮房向西

右石碑在幡房室津海上不知何人建焉古色可觀
寫以為斯書之證也 浪華 蘭室義近錄



自序

春雨蕭蕭無由愈寂木屐竹杖
蹣跚訪蘿月碧桃書屋蘿月曰
我有一番新話在焉子請綴之
予曰有之乎童蒙求我者亦有
日焉童蒙之求子之囑又何辭
焉然今世上翕然稱稗史家者

皆鉅儒碩師。讀破萬卷之書。通達三教之旨。馳辨摘藻之餘。患才之多。而所爲也。其話柄有所歸。而其筆端自如。有神矣。予固用管闕天之見。用錐指地之識。代而述焉。則縱有獻芹之志。安免濫竽之譏。蘿月曰。困困不有。

搏突者乎。爲之猶賢乎已。子其輯之。又孰曰非也。予無辭拒焉。輒編爲卷。以贈童蒙之求我者。譬諸炊砂爲飯。啗爲烹之耳。實不可食矣。云爾。

○年庚申季春三日神屋蓬洲題於礫水寓居

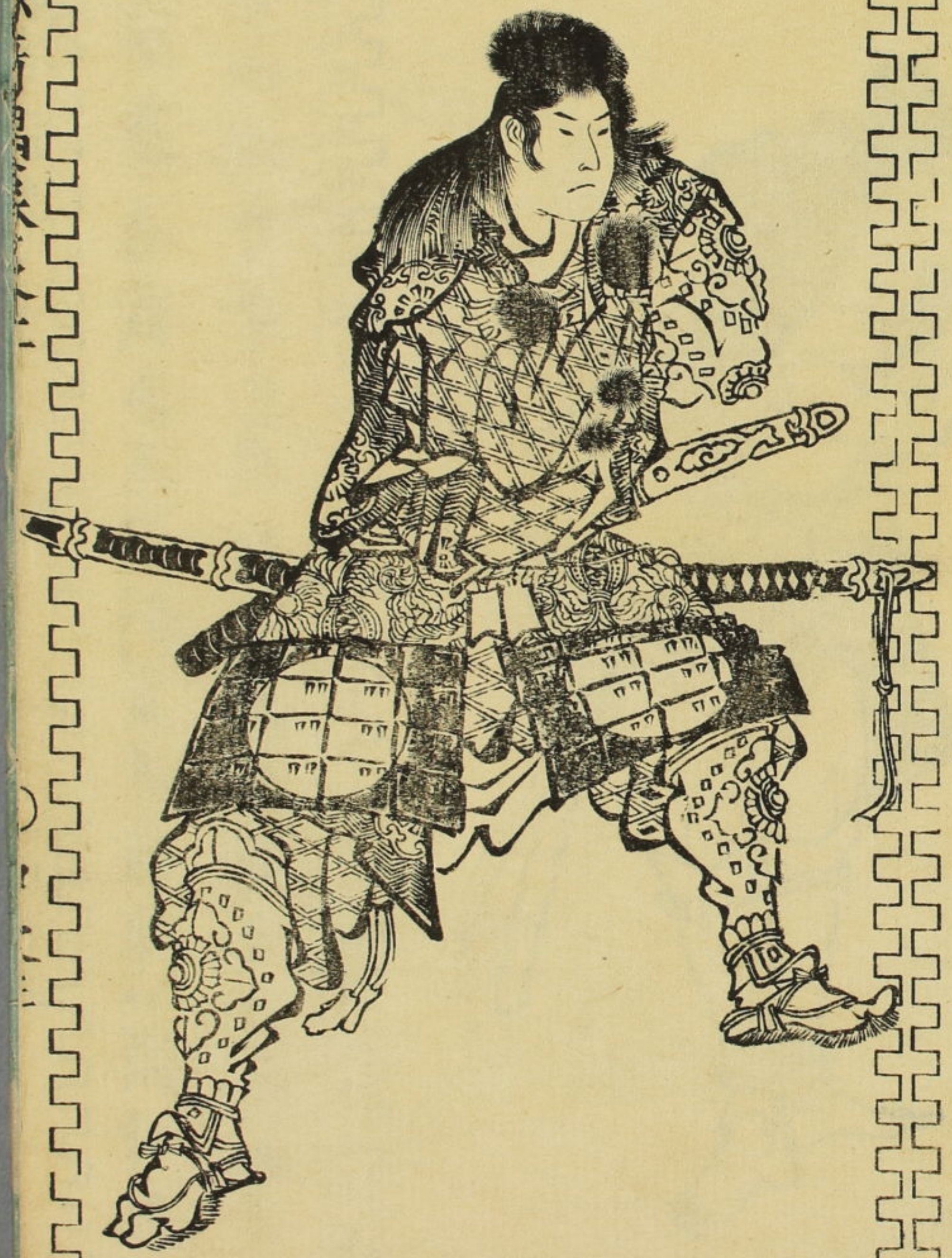


婉娘貞烈婦嫁在善人家凌雨負寒巾挑燈績亂麻
冤魂怨難散苦海顧重涯時得菩提種春風開法華

哭 琴



赤松春時



嘉慶一良夫精忠不枉孤破圍知銳力避世見雄圖
回棹去何速招魂呼不蘇英名垂寶劍豈久委塵塗

風為蛟以玉奉昔歲多年金劍真堪露雄心欲冲天
履霜楓葉裡抱月李為前斬得君親敵孝忠終兩全

赤松春之



常姫



娥媚良家女雲鬟倚艷粧丹心仇未復紅淚恨何長
霧翳月重色春回花報雪天像岸水含雙帶綉鴛鴦

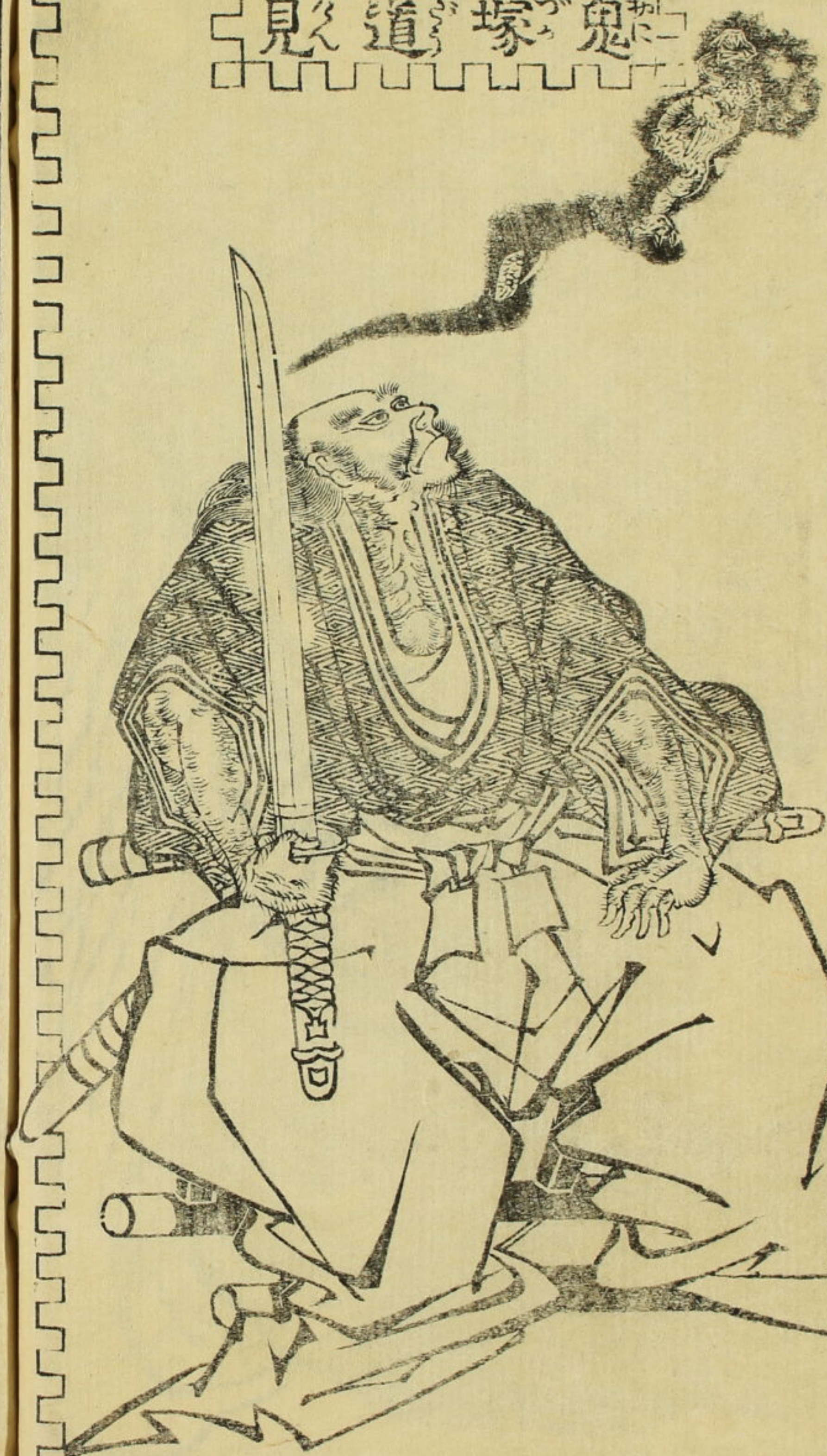


宵人積積惡餘禍及其門神盡身死悲衆口喧
冤靈祈不去良藥徒空存心渴以涇水何由知病除

射目又爲肩野何害賢徒於燕雀智欲奪國
白髮秋霜後青燈夜雨前猛獸不人類刀刀斷

家權
餘年

鬼塚道見



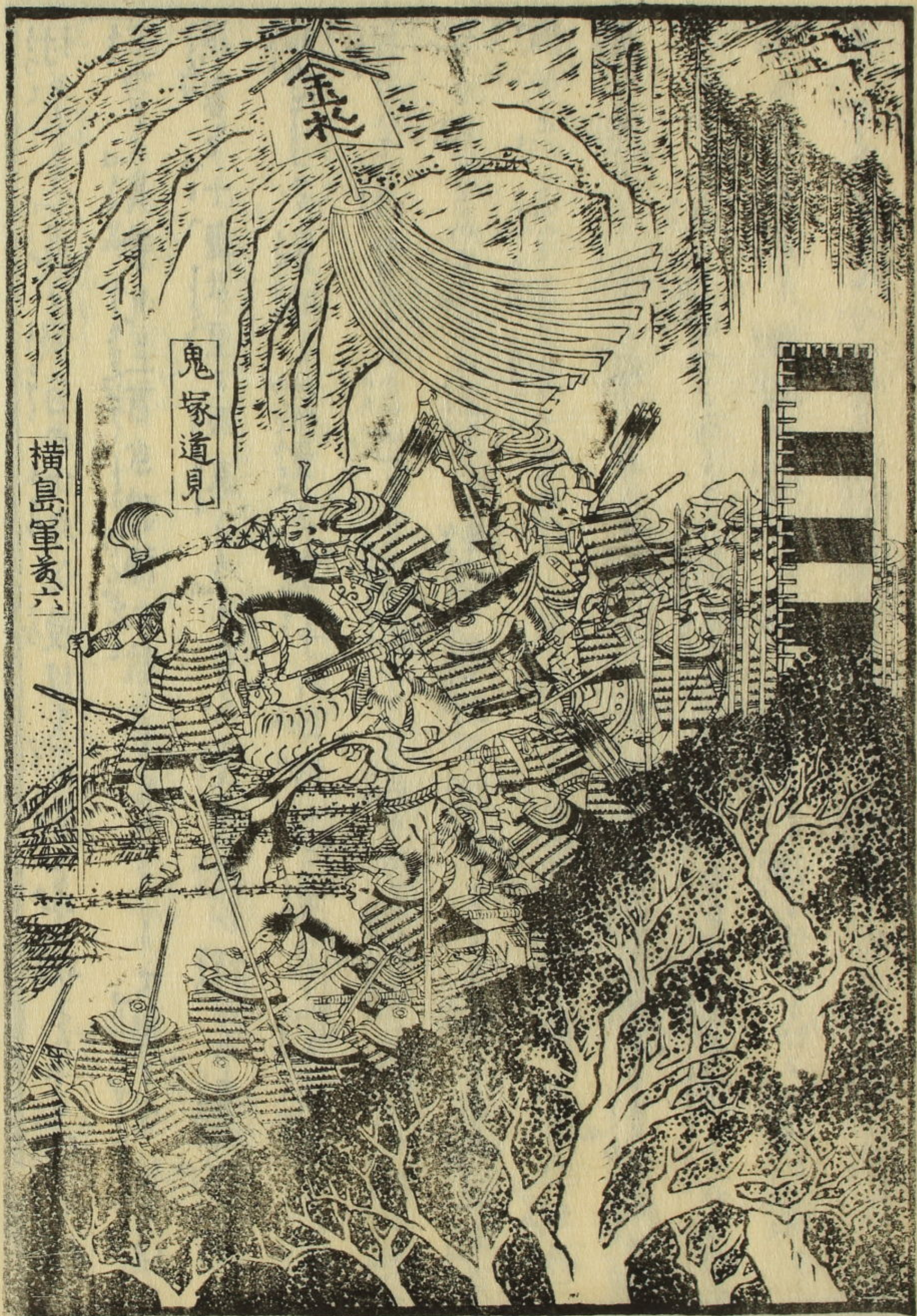
天縁奇遇卷之上

東武

柳亭種彦著作

第一 鞠

今ハ昔人皇百三代後花園院の御宇トシテ嘉土口元年六月
京都の將軍義教公赤松滿祐が領地と分つて赤松貞村と子と
欲しあひし滿祐は是を憤り遂に義教公を殺し奉る是は仍
官領磯川持之畠山持國義勝公を叩き奉り軍勢を催はし
彼の滿祐が権量する播州白幡の城を攻めしめし秋九月といへば
遂に滿祐は城に籠りて自殺をぞ遂にりし物に滿祐が
一門は赤松石工門尉常祐といふものなり天啓英智忠と勵む我と



鬼塚道見

横島軍六

鬼塚道見
圖一谷之
隱家



後の世と全う思ふと云ふも、
 此不美きとて天下の明く得づらんや、
 生る鬼塚を控へて、
 此所と云ふは、
 又時節に得ば、
 此世におもひ置くと云ふも、
 懐劍と云ふも、
 御定より候へば、
 後者の為、
 君恩海、
 後れり、
 三途の川の浅瀬を渡

奉へ、又常姫君の御更ら、
 御本懐と達せん、
 死出の御供仕り度、
 怒り、
 死ハ易く生ハ難し、
 疾ハ妻子と將く、
 春時、
 常姫と懐き、
 常姫を守僕して、
 心の中は、

家傳る宝くもども「斯成果くくくハ先裔の同姓なる汝が為
さるなり」後又子孫を懐くべしと春時を是と渡し死期をいせり
つとくも一間に入り何れと常姫が父上あひしとは叫ぶをふり
あまの常姫が可愛のものやとりさく懐剣抜る音をうり外の方へ
鬼塚通見士卒を下知しと鯨色と揚と先裏より妻子を渡して
春時一人常姫と懐くしとさるも主君の死骸を仇敵の手で度し
表の軒端に火を放ち一間のうちに人をもや常姫の腕を切り咽き
突くつとつとに伏しとくも夫と見たり心も海え目も時と
とつと倒し足と踏めくやぐ死骸をわきとて回る家
の出入りも押寄る軍勢の四方八面通向も山の下く見え
とつとさるは落る道もあつと出る妻子と前後と忘りて

立居る「それなく君の亡骸を覺奉りし姫と懐きし上ハ妻と
助け圓と出んやうと」只君がさぐり煙となりしとく
仇敵の手で度しとくもよ住家は立寄り以前放ちし烈火の
中へ入奉りやぐ妻子と懐きしと槍と抜き大勢を討入る
さへや曲者ごころと生捕り鬼塚公の御前へ引と手は得物と
引提し夫のものと真中は取囲め心得ると春時が彼長坂坡の
戦ひの初主を救ひ昔のうきくあつと長雲が勇を振い右往
左往は進立突き道つとつとくも忽ち一方を切破て斬道の
分ちて見えとく常姫を始めと親子三人恙なく春時ほと
留息つとある木陰に伏しと追手くめ其先をいづく道と
急ぐと鶉越とあつと落る由く方のそとと知れぬ山く谷と

